

かわらばん

第45号 2022年8月12日



投稿集 2022年参議院議員選挙をふりかえる
憲法改悪を許さない活動は、力あわせこれから！……石垣鈴江
今こそ透明で開かれた政治と社会の構築を……中村洋子
参院選挙結果を受けて、今後何をすべきか……A Y生
Book『スマホ脳』を読む—時代遅れにもいいことが……角田由紀子
おぼえがき「コロナ禍と日本社会の同調圧力」……坂元良江
Cinema ある日のFacebook から—出会い頭に『PLAN 75』……古厩志津子
Cinema ヤン・ヨンヒ監督四作目—スープとイデオロギー……丹羽雅代
子どもたちは戦争をどう感じているのだろう ~絵本『戦争が町にやってくる』が開く対話~……末永蒼生
短信：一票で変える女たちの会FBから

*記事中の URL、一部の写真は、出典サイトとリンクされています。クリックするとリンク先が開きます。

投稿集 二〇二二年参議院議員選挙をふりかえる

憲法改悪を許さない活動は、力あわせこれから！



石垣鈴江（清水女性九条の会）

今度の参院選、その前から「改憲派が大分勢いづいて怖い」という声が聞かれていた。私たちは、危機を感じて一月から毎月、区内の九条の会が連携し「清水九条の会・連絡会」で、駅や街、それに大学近くの若者の通学路などで、毎月ビラ入れ、スピーチ、署名など、二〇人〜三〇人で行動してきた。ロシアのウクライナ侵攻の惨状を毎日見せられて、「戦争ではなく、外交で平和を！」を訴えてきた。今月は七回目を草薙駅で行う計画です。

「いよいよ「憲法改悪を許さない」活動は、正念場だと話し合っています。」

そして、選挙二日前、あの元首相の殺害事件が起こった。マスクミヤ周辺の空気が何やら急変したような不気味な感じだった。これは選挙で大変なことになる……という恐怖を感じた。

この安倍元首相といえば、政治を私物化したような問題ばかりで、国会でも誠実な答弁もなく、不満を持つ国民は多いはずだったが、亡くなってからというもの、マスクミヤでは長期政権だの、世界に向けて国のため働いた立派な政治家だの、祭り上げるばかり、これまで説明責任や、問題発言を問う方はすっかり消えてしまった。

私がつとも許せないのは、レイプ事件で逮捕されるはずだった人間が、帰国便の到着空港で急遽、逮捕見送りとなったこと。彼は安倍総理(当時)にごく近い人間だということだ。やむなく提起した民事訴訟を振り返って、被害者の伊藤詩織さんが「やれるところまでできた」と、先日記者会見してくれたことはうれしかった。これから彼女にはジャーナリストとしての活躍を心から期待しています。

そして、参院選挙、結果は予想通り、岸田総理はすぐに安倍元首相の「国葬」まで言い出した。

民主主義の破壊は許さない……と言うが、これまでの私たちの活動から見ても、その民主主義を壊すような政治を行ってきたのが安倍元首相ではなかったのか。

ネットでも、「安倍国葬反対」の署名も拡がっている。

そしてもうひとつ、若者を、自分のいのちを差し出して、その生命保険で家族を養わなければ、と思わせるところまで追い込んでしまった宗教の実態、その若者が犯

罪に至ってしまった経緯、関わっている政治との関係など、このような事件を二度と起こさないため

にも、しつかり調査して明らかにして欲しい。

(七月二二日)

今こそ透明で開かれた政治と社会の構築を

中村洋子

参議院選挙直前に安倍元首相が銃撃されるという恐ろしい事件が起きた。その影響で多くの同情票が自民党に集まったことで与党が過半数の議席を得たことは非常に残念である。そして今この事件を受けて、政治と旧統一教会との癒着が問題視されている。今まで何故日本で男女平等が進まなかったのか、何故国民の声が国政に反映されないのか、今回の事件で徐々に見えてきた。その背景にある教団と自民党との密接な関係を無視できない。両者が右翼思想を共有しながら、自民党は組織票という恩恵を受け、教団はその見返りにイメーリアップにつながる政治家からの支援を受けて信者を増やしていった。この不当な状況が

長年放置され日本全体に浸透し多くの世代を超えた被害者を生んできたことも事実である。本来なら、政教分離に違反する行為であり、罰せられなければならないはずだが、罰せられるどころか、釈明まがいの開き直りで終わらせようとしている。その上に国葬まで行なおうとするのだから許しがたい。

政治に対する不信感が募る一方、明るいニュースもあった。六月一九日の東京都杉並区長選で岸

本聡子さんが初の女性区長という快挙を成し遂げた。市民による草の根運動で実現したお手本のような選挙だった。これを機に、他の自治体でも市民の声を政治に反映すべく市民のための市民による政治が行われることを期待したい。

岸本さんは、就任記者会見で明確なビジョンを掲げ、対話を重視する開かれた区政を行なっていくと語った。自治体レベルでリーダーシップを発揮してくれる人が現れたことは、国際社会から遅れをとっている日本に一筋の希望の光がさしたようであった。

政治は、一部の歪んだ考え方を持つ男性権力者の私物ではなく、社会を構成する女性を含む多くの市民の意見を反映して公平に行うべきものである。その意味でも、政府が今なすべきことは、国葬で事実を闇に葬ることではなく、徹底的に真相を究明し、今までの疑惑を払拭して透明で開かれた政治と社会の構築に舵を切ることである。新杉並区長から学べることは多々だ。

(七月二五日)



参院選挙結果を受けて、今後何をすべきか

AY生

予想されたこととはいえ、この国がますます良くない方向へ進み、方向転換が容易でない状況になりつつあると感じる。

ますますとは、これまでも、悪い方向へ進んできたと思うからだ。

何が悪いか、いちいち書き出せばそれだけで紙面が尽きる。

民主主義が壊されつつあり、再び戦争への道を歩み始めていないかと感じるが、如何なものだろうか。

具体的な現象面では、了見の狭い自民・公明党政治が続いたこと、野党が弱いこと、選挙での投票率が若い世代でどんどん下がっていること、大手のメディアは体制擁護に偏って批判を避けていること等々である。

こうしたことから、では、どうすれば方向転換が可能になるか？ こうなった原因を特定し、有効な対策も立てるべきだが、此処では

そうしたステップを踏まずに一足飛びに対応策を列挙すると、

・オカシイことはオカシイと声を上げること。

・オカシイことは、小さいうちに芽を摘まないと手遅れになる。気づいた人は勇気をもって声を上げ、それを周りに拡げること。

・意思表示は選挙まで待つことなく、常日頃、意見を表明し、賛同者を募ること。

・いつでも、どこでも、何度でもSNSで拡散し、双方向で議論すること。

では具体的には？ 幸い、「一票で変える女たちの会」のメンバーの方々は、ジェンダー問題をはじめ、南北朝鮮と日本の関係、外国人の人権問題(参政権問題や、入管制度の問題など)、教育、介護・医療制度、裁判、脱原発、監視社会、税制、選挙制度、食料問題、環境問題……など関心事の幅は広いようだ。

例えばここに挙げたような、【テーマ別分科会】をつくってみてはどうだろうか。

もう一つはリアルの会合を開ける【地域別会】をつくってみてはどうだろうか。

【テーマ別分科会】や【地域別会】で深めた意見を、『かわらばん』に掲載するなどして共有し、なるべく早く全国的オンライン会合などで確認し、「これは行動しよう」というテーマは、再び、テーマ別分科会、地域別会で活動することは出来ないだろうか。

全体で考え、個で動く、この繰り返しにより、各地域から国を変えてゆく運動を拡げ、投票率を上げ、戦争への道から転換する希望を持ちたいものだ。

(七月三〇日)



『一票で変える女たちの会』かわらばん
★印刷版をご希望の方は左記FAX、メール、ホームページの問合せ欄からご連絡ください。

★投稿大歓迎！

□ナ禍の中の暮らし、本や映画の紹介、地域での活動報告、選挙や地域の政治の動き、情報、ご意見、なんでもお寄せください。(一本について四〇〇字〜一六〇〇字)

宛先: 1pyodekaeru@gmail.com
郵便: 〒162-0823

東京都新宿区神楽河岸1-1

東京ボランティア・市民活動センター

メールボックスNo. 45

FAX: 03-5684-1412

mail: 1pyodekaeru@gmail.com

HP: <https://1pyo-de-kaeru.com>

★カンパのお願い
私たちの活動に賛同する皆さん、ぜひカンパを！

郵便振替口座:

記号番号 00110-6-420003

□座名称 一票で変える女たちの会

イッピョウデカエルオンナタチノカイ

銀行等から振り込む場合:

店名(店番) 〇一九(ゼロイチキキュウ)

店 (019)

預金種目 当座

□座番号 0420003



BOOK

『スマホ脳』を読む

時代遅れにもいいことが

角田由紀子

今の日本でスマホの普及率はどのくらいだろうか。NTTドコモモバイル社会研究所によれば、二〇二一年には四・四%しかなかったが、二二年を迎えた時点では九四%に達したとのこと。私はその残りの六%の一人ということらしい。東京で地下鉄に乗ってもJRに乗っても向かい側の座席に座っている人はほとんど全員がつむいてスマホをいじっている。男女年齢国籍を問わない現象だ。スウェーデンの精神科医、アンデシュ・ハンセンによる『スマホ脳』が日本で翻訳出版されたのは二〇年十一月のことであり、二一年五月には一三刷に達している。書評等でも取り上げられ、たちまちベストセラーとなった。私は地元図書館で貸し出しを申し込んだが、半年以上待たされた。この本は、スマホの有害性、問

題点を指摘するものなのに、こんなに多くの人の注意を引いたというのは、爆発的なスマホ利用者が実はどこことなく不安を抱えていたということであろう。ハンセン医師がスマホの問題に気付いたきっかけは、ここ数十年で精神的不調で受診する人の数が増えます増えているということであった。スウェーデンでは大人の九人に一人以上が抗うつ剤を服用している。生活が裕福になってくるにつれて不健康になるとはいったいどういうことかという疑問を彼は抱き、その矛盾を解明しようとした過程で生まれたのが本書だ。

私は、幸いはまだスマホを手にとっておらず、その恩恵に浴したことがない。新しもの好きでなかったし、機械音痴を自覚しているのでも、携帯電話でさえ3・11の後でようやく手にした。今もそれを使っていて、それで不自由と思つたことはない。

先の疑問への答えの一部は、「今、私たちが暮らす世界が人間にとつて非常に異質なものだとい

う事実だ。このミスマッチ、つまり、私たちを取り巻く環境と、人間の進化の結果が合っていないということが、私たちの心に影響を及ぼしているのだ」「今のこの社会は、人間の歴史のほんの一瞬に過ぎない。地球上に現れてから九九・九%の時間を、人間は狩猟と採取をして暮らしてきた。私たちの脳は、今でも当時の生活様式に最適化されている。脳はこの一万年変化していない——それが現実なのだ。生物学的にみると、あなたの脳はまだサバンナでくらしている」。私たちは人間としての生活と現実とのミスマッチにさいなまれていくというわけだ。

う本まである。私は買って読んだし、小学校教育のデジタル化の影響について書かれたものも目につけば読む。

サバンナの人間の脳は、最近の大変化に追いついていけないことは確かだ。良く知られていることだが、アップル社の創業者、スティーブ・ジョブスは、iPadを自分の子どもに使わせることには慎重になっているという。他のIT企業のトップは自分の子どもには自分たちが開発した商品を用いるには使わせたくないという。脳は若いほど悪影響を受けることは明らかにになっている。ジョブスは「ローテクな親」と言われているという。

弁護士なのにスマホなしで用が足りるなんて信じられないと若い人に言われる。ラインの仲間にならないので連絡が面倒ということでもあるらしい。そういうことかと思いつつ、そんなにいつも連絡しあうこともないんじゃないかと思つたりする。本書をはじめ、スマホの害悪が指摘されて久しい。『デジタル馬鹿』（ミシェル・デミュール著、鳥取絹子訳、花伝社）とい

情報を早く手に入れ早く処理することにはいかなる価値があるのか。便利なことはどういう価値を持つのか。私は、今でもスマホがなくて困つたという経験がない。ネットで調べものはするが、それで用が足りるのであれば、手書きのメモにしている。本書の中にもあるが、その方が遥かに記憶の助けになる。プリントアウトした画

面は記憶しにくい、手書きのそれを記憶するのは遙かに容易であり、結局効率的と私は思う。

あまり聞かなかった話だが、NSは常に人と比べることに追い込み、特に女子の自信を失わせるという。

サバンの時代とは比べ物にならない豊かな時代にあつて、スマホ依存にならずどう心の不調を克服するのか。著者の処方箋はシンプルだ。「睡眠を優先し、身体をよく動かし、社会的な関係を作り、適度なストレスに自分を晒し、スマホの使用を制限すること」である。この本で一番役に立ったアドバイスは、どんな運動も脳にいいということだ。これはサバンの時代に繋がる生活習慣の一つであるからだろう。著者の助言に従えば、スマホなしに元気に生きながらえることができそうだ。

(七月二日)



アンデシュ・ハンセン著
久山葉子訳
新潮新書 2019年



おはながさ

コロナ禍と日本社会の同調圧力……………坂元良江

高校生の頃「村八分」という映画を見た。静岡県の農村で現実に起きた村八分事件を新藤兼人の脚本で1953年に映画化されたものだった。選挙のたびに村で当たり前のように起こる替え玉選挙を新聞社に投書した女子高校生の家族が村八分になり村を追われる話だった。その後「村八分」の主人公石川皐月(のちに加瀬)さんは東京の大学を出て、ふえみんの前身婦人民主クラブの事務局長も務めるなど「めげない女」を貫いて生きておいでだ。

事件から70年余り、すっかり忘れていた「村八分」をコロナ禍で私は思い出した。

コロナが流行し始めた頃、東京は全国的に見て感染者の多い場所だった。私の住むコレクティブハウスには地方出身の単身者、子どものいるご家族が大勢住んでいる。彼ら彼女らは全員、故郷の親、親戚から「帰って来ないでくれ」とのメッセージを受け取っていた。「『息子さんが帰ってきたら、あなたには14日間会いません』と友達が言うから帰ってくるからおふくろが言うんだよ」と単身の男性は言う。病気で入院する孫を見舞いにきた祖父は、「帰ったら『14日間出社するな』と言われています」と言う。どこにも感染者はいないのに東京へ行ってきたからだ。テレビでは東京ナ

ンバーの車で実家に帰ったら、翌日「すぐ帰ってください」と近隣の人からの大きな貼り紙が車に貼られているのが報道されていた。

東京が特別なコロナ感染地ではないことはすでに証明されている。科学的根拠とは関係なく、異質なものを排除して自分たちのコミュニティーを守ろうという集団の意識に驚かされる。

もう一つ不可解なのはマスク着用の日本人の意識だ。一度マスクをすると決めたら、畑で一人で農作業をする時も友人のお母さんはマスクを取らないという。車を一人で運転していてもマスクをしている人を見かけるのは度々だ。猛暑の中で人通りの少ないところでもマスクを取る人はほとんどいない。まだマスクを外せる状況にはないとはいえ、外国の映像などを見るにつけ、日本人はどのような状態になればマスクを取るのだろうか考える。きっと「偉い人」の「お墨付き」が必要なのだろう。

ひとたび何か事が起これば日本人はどのように動くのか、地域社会がどのような意識を持っていて、どのような動きをとるのがよくわかった。コロナ禍は日本人独特の同調圧力の怖さと「村八分」の時代と意識は大きくは変わっていないことを知らしめる結果となったようだ。

(8月3日)

CINEMA

明日のFacebookから
出会い頭に『PLAN75』

古厩志津子

久しぶりに逢った高校時代の友人ととんでもない映画を観てしまった。タイトルは「プラン75」。で、見終わって思い出したのは50年前彼女とふたりで観たSF映画『ソイレントグリーン』。人口爆発と食糧難で描かれた当時の近未来像は、50年を経た今まるで明日のあたしたちの姿みたいだ。

そう、『プラン75』で描かれている近未来は遠い架空の世界ではない。高齢者対策と食糧難に向けて政府が決めた政策、プラン75、日本人は75歳になったら尊厳死の決定権がもらえる。

平日のアップリンク吉祥寺、100席程の館内は観客が30人くらい、ほぼシニアだ。そしてなぜか観客は後ろ半分に身を寄せ合っている。寄せ合いながらちよっぴり気合いが入っている感じが面白い。

映画はとても静かに始まって、法律で尊厳死が認められた「異常な世界の日常」が淡々と語られていく。そこでは誰も大きな声をあげることもなく、けれど現実を静かに受け入れて懸命に生きている。途中、ふと自分が泣いているのに気がついた。涙のせいでマスクの上辺がしっとり濡れている。あれ？と狼狽えて周りを窺うと、同じタイミンングであちこちからすすり泣きが聞こえてきた。スクリーンには倍賞千恵子扮する主人公角谷ミチの日々の静かな暮らしが流れている。それは別に盛り上がり過ぎて泣くような場面じゃない。けれどあたしの心に怒りに似た感情が届いた。今年のカンヌ国際映画祭で「ある視点」部門カメラドール特別表彰を受賞したこの作品、脚本・監督は早川千絵さん。

ミチの他、プラン75に関わる人々の様々な想いを語りながら映画は淡々と進んでいく。そして回収なしの全部投げっぱなしラストに暫く唸って立ち上がれない。そ

うなんだ、このひとは、この監督さんは、あたしたちを責めているんでも追いつめていっているでもない。闘いを求めているのでもない。今生きている世界にやがて訪れるだろう明日をそつと見せてくれているんだ。

その時近くからはなをすすり上げる音が聞こえて、あたし立ち上がって叫びたくなった。

「ねえ、泣いてる場合じゃないよ！死ぬ権利なんて貰っておとなしくしてちゃだめ！命を守らない法律なんて要らないって言わなくちゃ」

だけどあたしは知ってる。「子どもたちの未来のために」とか「大切なひとたちの明日が輝くように」っていう美しい言葉に多くのシニア同輩たちが粛々として殉じていく様はコロナ禍で散々見てきたから。年齢を理由に職場を追われ、住むことも叶わず追いつめられていく角谷チエは明日のあたしたちなのだ。

早川さん、あなたに逢いたくないあ、そしていろいろ聞いてみたい。

この映画はあたしにもうひとつ問いを突きつける。実はあたし、今、年齢を理由に職場で働く権利を少しずつ奪われている。きっかけは5月の救急車騒ぎだけれど、説明も聞かず即日7月からの勤務日数減を通告されたとき「あ、そうなんだ」って思った。6年前勤務日数24日間であまったパート契約が、昨年事前承諾無しの体制変更で20日間になり、実際には20日すら守られないまま、今回の騒動でいきなり15日勤務になった。ずつと一緒に働いてきた同世代の友人は「年寄りはお邪魔にならないうちに去るのみ」って言いながら先月退職した。職場は今世代交代が進んでいる。

年を取ると弱気になる（これは平和主義とかことなかれ主義とも言い換えられる）。これは、なってみて初めてわかる。ましてあたしはこの職場をその管理職との面接で決めた。この人の元で働きたいと思った。そんないきさつがあ



るから苦しいけれどアタシは受け入れることに決めた。我慢したんじゃない、赦したんだ。ブラックな職場環境も未熟な管理職も、最低賃金に後押しされて初めて上がる微々たる給料も、ここを終わる職場に決めた自分に責任をとらせて全てを赦すことにしたんだ。そして代わりに新しい世界への無謀なチャレンジを自分に課した。そのために身体のメンテをし、「終活」に向けていたエネルギーを「就活」に変えたんだ(^^)

はったりとやせ我慢が持ち味のアタシにはそれはそれで、すぐよかつたんだけど……この映画を見るまではね。

主人公チエは最後に自分で生

きる選択をする。(ネタバレごめんなさい)。家も仕事も失って身寄りも無いチエにとつて、たぶんその選択に未来はないだろうと思うと切ない。けれどラストの倍賞千恵子の深いシワの刻まれた神々しいほど美しい横顔が心から離れない。たとえどんな結果になろうとも彼女は確かに「自分で選んだ」「私の人生は私のものですから……」。チエから「で、あなたはそれでいいの?」って優しく問われてる感じがした。

明日からもアタシは今始めようとしていくことに精一杯向かっていくだろう。そしてそれが実現するまで生業15日勤務も続けるだろう。職場にはもうなんの執着も無いから淡々とこなして行くだろう。

アタシには理解してくれる友だちがいるし、ハラハラ見ている家族もいる、やりたいことも100あるし、だからチエさん、アタシは行くよ。

けれど、ちよっぴり不安にな

る。この映画を見てしまったから、アタシ日々の小さな違和感に突然弾けちゃうかもしれない。参ったなあ……(;-;)お口にチャック♪出来るかなあ(^^;ま、いいか、弾けちゃったら、その時は全速力で逃げればいいね。

* Facebookは横書きのお喋り文化です。

それは原稿用紙を埋める本業の作業とは全く異なるものだと、今回初めて実感しました。

敢えての原文ママ掲載、薄くて読みにくいところはお許しください。



ヤン・ヨンヒ監督四作目
スープとイデオロギー

丹羽雅代

ヤン・ヨンヒ監督の第四作目となるドキュメンタリー映画「スープとイデオロギー」を観た。今回の作品は四・三事件を経験した、監督自身の母による初めての、そして最後の語りを中心に描き出したもの。

以前、関西の友人に、ヤンさんの映画面白かったよと伝えたら、「関西ではあまり良く言わない人もいる」とのこと。なんでだろうかと考えてみた。かつて一、二本目を観て残った自分の中のモヤッとした気分を思い起こした。きつとこれだ——ヤンさんのお父^{アボジ}さんが総連(在日朝鮮人総聯合会)の偉い人だったということにかかわるんじゃないかな。

一〇年余り前に亡くなったヤンさんのアボジは、本当に絵にかいたような総連のえらいさんだった

ようだ。関西の総連の立ち上げの一人で、たくさんの役職を引き受け、副代表になり、また朝鮮学校の支援者の核としても多大な力を発揮した方だ。

胸にこれでもかというくらいいたくさんの勲章を付けたアボジの遺影が、何よりもそれを物語る。多分公私ともに、あらゆる場所で、朝鮮民主主義人民共和国がいかにすばらしいかを語ったことだろう。ご自身もオモニも共に何度か共和国を訪問し、共和国に役立つ側に積極的に立つ活動家だったそう。

ヨンヒさんの三人の兄たちは全員、共和国への帰還事業でピョンヤンで生活している（一人は病死）。なんと誇らしい子どもたちだったことだろう（つつましい暮らしぶりとはいえ、ピョンヤン住



まいというだけで特別らしい）。

私自身も、親しかった友人の一家が、六二年ころ、成功していた事業や豊かな生活を整理し、誇りをもって北へ帰還しているの

で、当時鳴り物入りでたえられた帰還事業の空気を知らないでもない。だが最初の華々しさがだんだん消えていくにつれ、二週間に一度くらい交換していた友人の手紙のニュアンスが、少しずつ変わっていった。彼女の手紙には、記念になるものが欲しい、学用品や洋服など、私の使ったもので構わないから送ってくれないかと遠慮がちにいう内容がだんだん多くなっていた。三回くらいは送ったものの、結構面倒でお金もかかり、住所も二、三回変わって、またこの表記が難しい。高校生にとつては負担感が大きく、手紙のやり取りもいつしかやめてしまった。

ヤンさんのオモニは、息子たちの生活が少しでも豊かなものになるようにと、大きな段ボール箱に何でもかんでも詰め込みせつせと送っていた。お金もぎつとたくさん送っていたことだろう。画面

に、アボジもないし、人に借りてまでお金を送るのはやめにしてほしいとヨンヒさんが話す場面がある。そんなことがずっと続いていたようだ。

彼女の映画作品「ディア・ピョンヤン」や「かぞくのくに」（ヤンさんを安藤サクラさんが演じた。これはこれですごく興味深いものだった）では、兄たちのピョンヤンでの生活などが垣間見られた。彼女はそれらの作品を発表したことで、一度と訪問できなくなつたらしい。オモニは毎年、兄たちのもとに行き続けていたようだ。アボジの墓も希望どおりピョンヤンにあるらしい。

私には当時、ブツブツ言いながら、大きな段ボールにいろいろ詰めて共和国に送っていた友達もいる。南北合同の検事団が構成された二〇〇〇年の女性国際戦犯法廷も参加した。アジア女性資料センターのスタディツアーで共和国を訪問したこともある。協力者の力や時代の空気の後押しもあって、本当に様々興味深かった……とい

う個人的な経験はさておき、映画の話に戻ろう。

ヨンヒ監督のアボジが亡くなって六年、オモニは生まれたときからずっと暮らしてきた大阪の猪飼野で一人暮らしを続けていた。娘が暮らす東京に本拠地を移すなどということは、およそ考えたことも話し合ったこともなかったという。今は拉致問題などをきっかけに共和国への訪問も簡単ではないが、いずれは夫の眠る墓に葬られることを望んでいる。今でも首相様をたたえる歌はすらすらと口を突いて出てくる。

訪ねてきたヨンヒさんの夫のために、オモニはサムゲタンを作る。まるごと一羽の鶏を買い、おなかをあげ、山ほどのニンニクと、なつめ・高麗人参（オモニは五個入れますとのこと）を詰められるだけ詰める。あとはしっかりと縫い合わせ、四、五時間ひたすらぐつぐつ。画面からもそのパワーが伝わってくる。ヨンヒさんの夫は、オモニの作業をじっくり観察して後に再現し、オモニをもてなす。

もう一つの大きな主題がある。それは映画の冒頭、入院中のオモニの口から出た、ヨンヒさんが全く初めて聞く話だった。大虐殺の光景が語られるのだ。オモニは生まれも育ちも大阪だけれど、第二次大戦後、すっかり焼け野原になった大阪を離れ、出身地の済州島^{チジュ}でしばらく暮らしていたらしい。一八歳の彼女がそこで出会ったのは「済州四・三事件」。

彼女はその発端となった前年一九四七年の三・一独立運動記念のパレードの時に、子どもたちを含む何人かが警官の乗った馬にけられたり、暴力を振るわれて亡くなった事件にも遭遇していたらしい。済州四・三事件は現代韓国史のなかでも本当に大きな事件だが、李承晩から続く保守軍事政権下で、一切語ることが禁じられていた。

済州島と大阪間は、戦時中「君が代丸」という定期便が往来していた。在日の人が圧倒的に大阪に集中していたのも当然のことだった。恋人が殺され、あやういこと

ろをのがれたオモニも、命からがら妹たちの手を引いて密航したのだが、その足はなじみ深い大阪に向かったという。

玄基^{ヒョンギン}栄^{キョウ}さんの『スニおばさん』や金石^{キムソクボム}範^{ボム}さんの『火山島』などが八〇年代に入ると日本で刊行され、韓国では全く表に出てこなかった四・三事件は、日本で知られるようになっていた。一方の韓国では、民主化が進んで初めて済州島以外の人々にも事件のことが知られるようになったのが、ここ三〇年足らずのことだ。真実はまだまだ明らかにされつつある途上だ。

オモニは大阪でアボジに出会い、結婚して、四人の子どもを産み育て、でも三人の息子たちはそろって北へ帰還してしまい、アボジも見送り、いまは家族はヨンヒさんだけ。

オモニのアルツハイマーが進行しているらしいと分かった時、ヨンヒさんはするべきことが明確になったという。オモニを、生まれた場所・済州島に連れて行くこと。

映画では詳しくは描かれていなかったけれど、大変な作業が必要だったろうことは想像に難くない。まず国籍の問題がある。オモニは北の共和国だから、南の韓国に行くことは手続きが簡単ではない。特別に一度だけ有効のパスポートも作らなくてはならない。島の様子も四・三事件当時とは完全に変わっている。殺されたオモニの昔の恋人の墓はあるのか、住んでいた場所の面影は見つけられるかどうか……。

私は三度ほど済州島に行っているけれど、スクリーンに見るその様子は、以前とすっかり変わっていた。韓国では八七年民主抗争以後の変化は特に急激だ。憲法も刷新され、人権が尊ばれ、ジェンダー平等が進められている。隠し続けられた四・三事件も、歴史的事実の検証が進み、かつては犯罪者扱いされた事件研究者が日本大使になつたなど、驚くばかり。

とにかく様々な関門を超え、済州島にオモニとヨンヒさん夫妻はやってきた。大統領は事件の国家責任を認め、謝罪し、立派な記念

館もできている。累々と墓石が並び、まだ不明な事もかなり多く、事実の発掘は現在も続いている。

三人は慰霊式に出席し、オモニの生まれ育ったところを訪ねる。どこまでも美しい海や島の様子は、アルツハイマーが進行するオモニの目にどう映っているのかは語られない。しかし、ヨンヒさんの中での様々な葛藤は、しつかり一段落ついたようだ。この映画は、彼女にしかできない仕事だった。観ることができてよかったと素直に感じられた。

それにしてもこの隣国との関係を、どうやって私の住むこの国は進めていくのだろうか。



済州島 sh Cho による Pixabay からの画像

子どもたちは戦争をどう感じているのだろうか 〜絵本『戦争が町にやってくる』が開く対話〜

末永蒼生（アートセラピスト・「色彩学校」主宰）

「戦争は子どもたちへの最大の虐待」との文に出会い共感した。末永蒼生さんが児童書「戦争が町にやってくる」を解説し、末永さんご自身が長子子どもたちと絵を描くことで付き合ってきた経験が語られている。「かわらばん」への転載をお願いしたところ快く承諾いただいた。（坂元良江）

●大規模な児童虐待である戦争

『戦争が町にやってくる』（金原 瑞人訳 ブロンズ新社刊）という絵本のタイトルは、いまこそすべての人々の心に響くにちがいない。

作者のロマナ・ロマニーシンとアンドリー・レシヴはウクライナに生まれリヴィウを拠点に活動している絵本作家。出版されたのは二〇一五年だ。前年、ロシアによ



『戦争が町にやってくる』
ブロンズ新社刊

るクリミア侵攻を目のあたりにした。作者二人がこの絵本を作った動機は戦争について親子で語り合う本を制作しようと考えたからだという。この絵本はすでに一五言語に翻訳され、世界中で読まれているという。

親子はもちろん、大人と子どもが戦争について語り合うことがいま何より必要なのだと思う。今回の戦争については、ロシアとウクライナ双方の歴史的経緯についてメディアでは様々な解説が流れる。けれど、私は異なった視点から戦争を見ている。

それは、そもそも戦争というものは巨大な規模の児童虐待なのだということ。戦争は大人たちが勝

手に始め、最初の犠牲者になるのは弱者である子どもたちだ。弱者という意味は子どもたちは「戦争をやめて!」という意志表示をする間もなく戦いが始まれば傷つき命を落としていく。泣いて親にしがみつき傷を負ってただベッドに横たわるしかない。その子どもの気持ちについて、直接耳を傾けるインタビュー報道がどれほどあるだろう。

そんな中、この絵本を見るとどのページの絵も子どもが戦争にショックを受けた時の心を映し出しているように感じられてならない。三〇歳でクリミア侵攻を体験した作者たちの鋭い感受性によって、言葉だけでは語れない戦争の不条理を色に置き換えることができたのかもしれない。

ページをめくっていくと、最初の一〇ページまでは犬や鳥などが擬人化された愛らしい主人公三人の暮らしが描かれている。彼らが住む町ロンドは花や音楽に満ちた幸せそうな明るい世界だ。

ところが、次のページではいきなり彩りが消えダークな紫色を背

景に黒々とした荒々しいタッチで侵攻してくる戦車が描かれる。そして「戦争が町にやってきたのです」という言葉が続く。明るい彩りの世界がいきなりモノクロームで塗られた戦争のページに置き換わるのだ。このコントラストが、突然戦争が押し寄せてきた臨場感と恐怖を伝えてくる。

そう、このリアリティこそ子どもたちの眼に映った戦争なのだと思う。私がそう感じる理由がある。というのも、私がこれまで数多く見てきた紛争や戦時下にある子どもたちが描いた絵と重なったからだ。



『戦争が町にやってくる』より

●戦争や大災害にショックを受けた子どもたちの絵に表れる色

私が五〇年来続けてきた「子どものアトリエ」教室は、絵の上手い下手を評価するのではなく、どんな表現でもOK!という自由表現の場だ。嬉しいこと悲しいこと、夢や未来への思いなどを思い切り吐露できる空間。時には病氣や事故、災害を体験した辛さなども画用紙に解き放たれる。

阪神淡路大震災の直後、避難所に画材を運び子どもたちと一緒に絵を描いた。その時に目にした絵の多くは、赤と黒、黄色と黒など対比的な配色で画面が分割されていた。あたかも世界が引き裂かれたような表現だった。後にベトナムのホーチミン市に旅をした折、



阪神淡路大震災直後に5歳の男児が描いた「赤い海」(提供:末永蒼生)

(下)ベトナムの少女が描いた戦争体験の記憶。画面が左右に分割されている(提供:末永蒼生)



東日本大震災直後、7歳の娘が描いた「夜に咲く花」。闇夜の黒と花の赤の対比が不安の中で生きようとする心を感じさせる(提供:末永蒼生・クレヨンネット)

戦争記念館でベトナム戦争の記憶を描いた子どもたちの絵を見る機会があった。それらの絵は阪神淡路大震災を経験した子どもたちの色遣いと瓜二つだった。やはり暗い色で描かれた爆撃の場面と明るい彩りの平和な世界が二分された表現だったのだ。

似た表現は、その後ニューヨーク同時多発テロを目撃した子どもたちの絵にも見られた。さらに、原発事故を引き起こした東日本大地震の避難所で私たちが行ったアート

によるケア活動の場でも多く見られた。そう、子どもたちは戦争や災害で心に走った亀裂の痛みや絶望感をストレートに描き出す。そうやって小さな胸には抱えきれない不安を吐き出しているのだ。今のロシア侵攻後、ウクライナから日本に避難してきた子どもたちの絵がテレビで報じられた。一人の少女はやはり画面を二分割した構図で平和の空と戦火を描き分け、赤く塗った戦場の部分を切り捨てたいと語っていた。

●子どもたちは本当のことを知りたい、戦争についても

私自身生まれて間もない頃、母に背負われて東京空襲の空の下を生き延びた。そのこと

を折に触れ母から聞かされていた。いま、子どもに戦争の話をする人もいるかもしれない。でもこの絵本は子どもと語り合うための大切なテキストだと思う。ここで、私の「子どものアトリエ」教室での最近のエピソードを述べたい。

クラスの担当カウンセラーが一人の少女とウクライナでの戦争について話そうとしたら、最初は「わたしに関係ないもん」とそっけない反応だったという。カウンセラーが「外国の戦争でもじつは私たちにも深い関係があるんだよ」と説明した。すると少女の目の色が変わり、「もつとその話を聞きたい」と顔を向けたのだ。

日々の戦争報道を子どもたちも耳にしている。日頃、暴力やいじめはいけないと教えられているの



作者のロマナ・ロマニーシンさんとアンドリー・レシヴさん（提供：ブロンズ新社）

だから関心や疑問を感じないはずはない。しかし周りの大人たちがその話題を避ければ子どもたちも無関心を装うかもしれない。戦争について考えようとする気持ちも陰るのではないだろうか。

戦争は突然起きる自然災害ではない。油断していると憎しみも暴力もひそかに人の心の陰に棲みつくのだ。私たちは日常に紛れそのことへの敏感さと警戒心を鈍らせがちだ。

『戦争が町にやってくる』の作者たちが受けたインタビューの中で、アンドリー・レシヴは絵本で伝えたいメッセージに

ついて次のように語っている。「世界中に共通することですが、誰もが自分の居場所を持つべきだという大切なメッセージでもあります。私たちは自分自身について考え、自分の長所や底力は何なのか、自分の得意とすることは何なのかを見いだす必要があります。自分が一番得意なことをすればいいのです。それは、誰にとつても重要な、共通の任務であり、共通の勝利でもあるのです」。(ブロンズ新社によるインタビューより)

この言葉の深さは、戦場の現実だけでなく一見平和に思えるときの人生のあり方にも通じることだと思う。人が個性や唯一無二の自分らしさを手放すとき自己不信が生まれ、憎しみや暴力の影が近づいてくるからだ。ここで語られている「勝利」とは平和であることはいままでもない。

この絵本の最後は、光の力で戦争を無力化し町に明るく穏やかな世界が訪れて終わる。赤いヒナゲシの花が次々に咲き始めるシーンは心を熱くする。ヒナゲシは失われた命を忘れないことの象徴だと



『戦争が町にやってくる』最後のページ（提供：ブロンズ新社）

いう。祈りの込められたようなこのページを見て、私はあらためて大人ができることはどんなことかということと思う。それは未来に向かつて今を生きている子どもたちそれぞれ、心の多様な彩りを陰らせないことではないだろうか。この絵本を子どもたちと開き、誰もがたった一人の自分を生きることの大切さを語り合うこともその一歩になるに違いない。

末永蒼生（すえなが たみお）
色彩心理研究家／「色彩学校」「国際アートセラピー色彩心理協会」代表理事

一九六〇年代から実験的な美術活動を行い、近年、当時の記録映画が内外の美術館で上映されている。六四年より日本児童画研究会で色彩心理の研究を行い、六六年「子どものアトリエ・アートランド」を創立、八九年に「色彩学校」を開校。色彩心理とアートセラピーを組み合わせた「末永ハート&カラー・メソッド」を体系化。多摩美術大学非常勤講師をはじめ、内外の大学で講義を担当。東日本大震災など各地の被災地でアートセラピーの活動を支援。NHK「課外授業ようこそ先輩」などテレビ出演や講演活動も多い。著書に『ロングセラーとなった「色彩自由自在」シリーズ（晶文社）』『心の病気になるらない色彩セラピー』（PHP）など多数。

*本エッセイの引用元

「国際アートセラピー色彩心理協会」会員専用サイト会員誌「カラーリンク」六月号 Vol.35
arthrapy-color.jp/colorlink/

(ネット配信中)

7月18日

知る人ぞ知る、あの水玉消防団が帰ってくる!?

「水玉消防団」は、七〇年代末結成された女性五人によるロックバンド。ほぼ全員が楽器未経験者。一九八一年にクラウド・ファンディングでリリースした自主制作盤『乙女の祈りはダッダッダ!』は、発売数ヶ月で二千枚を売り上げた……都内のライブハウスを中心に、反原



発や女の祭りなどの各地のフェスティバル、大挙祭、九州から北海道までのツアー、京大西部講堂や内田裕也年末オールナイトなどで多数のギグ……

7月17日

RAWA(アフガニスタン女性革命協会)と連帯する会からの呼びかけです。地震被害に苦しむアフガニスタンへの緊急支援に協力を!

北極圏250kmを走ってアフガニ

スタン緊急人道支援 RUN FOR RAWA

……この挑戦を「RUN FOR RAWA」として皆様に応援して頂き、集まった資金の全てを食糧危機にあるアフガニスタンへの緊急支援として、現地で人道支援を行うRAWAへ届けます!



このプロジェクトはRAWAと共催です。

7月15日

性被害を实名で告発。前後編あり。

【前編】二二歳元女性自衛官が实名・顔出して自衛隊内での「性被害」を告発 - AERA dot.

……五ノ井里奈さん(二二)は、陸上自衛隊に所属していた二〇二一年の六月〜八月、複数の上官から集団でセクハラを受けたという。上長に被害を訴えても取り合ってもらえず、自衛隊内の捜査機関に被害届を出しても、検察からは不起訴とされた。現在は検察審査会に不服申し立てをし、結果を待っている。五ノ井

さんは、AERA dot.の単独インタビューに応じ、「日常的に起きていたセクハラ被害から、残された女性隊員を守りたい」と、自身の受けた体験を語った……

7月13日

この番組は必見です!

【白井聡 ニッポンの正体】原発事故はまた起きる! 最高裁、驚愕の無責任判決 ゲスト: 馬奈木徹太郎さん - デモクラシータイムス

東京電力福島第一原発事故について被害者が国の賠償責任を問うた訴訟で、最高裁が六月に、「責任がない」という判断を示しました。この判決をどう見るのか。また、今後再び事故が起きうる可能性について福島の記事を基に再検証しました……

7月7日

公益社団法人日本産婦人科学会声明 「米国最高裁の「ロー対ウェイド」判決を覆す判断に抗議する」

二〇二二年六月二十六日、人工妊娠中絶を禁止する法律を合憲とする判決が下されたことにより、アメリカのケンタッキー、ルイジアナ、アーカンソー、サウスダコタ、ミズーリ、オクラホマ、アラバマの各州では、人工妊娠中絶ができなくなり、他州に移動して手術を受ける経済力のない女性が人工妊娠中絶を受ける権利を奪われることに対して……

「……我々は女性の健康を守るプロフェッショナルとして、世界の全ての女性が自由意思で人工妊娠中絶を選択できることが保障されることを求め、米国における女性の人権侵害に断固反対します」との声明を発表。

7月7日

#奨学金返せない「奨学金」という名の債務の帳消しを求めます!

6月28日

アメリカ最高裁、中絶の権利を覆す

中絶の権利規制、沈黙してきた男性たちに「声を上げて。全員の問題」。アスリートからも強い反発 - ハフポスト日本版

アメリカ最高裁は、女性が人工妊娠中絶を選ぶ憲法上の権利を認めた「ロー対ウェイド判決」を覆す判断

を下した。女子サッカーのミーガン・ラピノー選手は、試合前の記者会見で訴えた。
 「今日はサッカーの話だけでできればよかったけど」
 女子サッカーアメリカ代表のミーガン・ラピノー選手は、コロンビアとの親善試合を控えた記者会見でこう語った。



「しかし、今日はロー対ウェイド裁判の判決が覆り、それほどんことより優先しなければいけない」

6月28日
 原発も核もいらぬ★全国の女たちア
 クシヨンのコトから。なんの咎もない
 鳥たちに申し訳ないない気もするが。

日本には謎の鳥がいる。
 正体はよく分らない。
 中国から見れば「力王」に見える。
 米国から見れば「チキン」に見える。
 欧州から見れば「アホウドリ」に見える。
 日本の有権者には「サキ」だと思われている。
 でも鳥自身は「ハト」だと言っている。
 「ハト」だと言っている。
 「私のはあの鳥は日本の「ガン」だと思おう。」

6月19日
 生業訴訟最高裁判決後の報告集会。
 国の賠償責任を認めず。

最高裁判決後の報告集会ライブ配信
<https://youtu.be/sODIFt05n8>

6月17日



フランスに二人目となる女性首相が誕生。一方日本は女性政治家比率の国際ランキングで160位以下に急落中。

トレイドマークはくわえタバコ

と鋭い眼差し……フランス史上二人となる女性首相、エリザベット・ボルヌの知られざる素顔とは？
 —
 フィガロ ジャポン

6月19日

想田和弘さんのFB (六月一五日)

中村哲医師の二一年を追ったドキュメンタリーの劇場版「荒野に希望の灯をともし」(谷津賢二監督)の予告編が解禁されました。やばい。予告編を見るだけで泣けてくる。この映画、一人でも多くの方に見てい



ただきたい。今こそ必見です。

6月14日

(紹介文より)2019年9月23日、沖縄「慰霊の日」を迎えた日に放送された番組。令和の時代になった今、改めて沖縄の問題に向き合い、考えていくことが重要です。戦後の沖縄の歴史を知ること、沖縄への理解を深め、

現代につながる問題について関心をもってもらうため、この番組が企画されました。台湾で生まれ育ち、終戦後沖縄に移住。その後沖縄の本土復帰まで沖縄に在住し、その歴史を報道する側からみてきた川平朝清。彼がその時代に体験し、感じたことを、息子であるジョン・カピラがインタビュー。
 STORIES OF OKINAWA — J·WAVE SELECTION GENERATION TO GENERATION

6月14日

天才政治漫画家ぼうごなつこさん、ますますさえてます。

56回 年金カット砲 2022.6.10

ありとあらゆる値段が上がって、庶民の生活が直撃するなか、年金受給者の下に...

あの...年金って物価が上がったら年金額も上がるんじゃないかってしつこく...
 4か値スライド方式

実は2016年に安倍政権下で成立した「年金カット法案」で、年金額は賃金低下にも連動することになった。た...
 年金反対

7月の参院選で彼らに投票したり投票を棄権したら国民は年金の減額を受け入れている...
 賛成したのは自民党、公明党、日本維新の会

なんてことになりませぬ